

慶谷壽信先生の学問などについて (1)

—exhaustive であれ—

吉池孝一 中村雅之

ウェブサイト「古代文字資料館」には現在「長田夏樹学術資料庫」および「豊田五郎学術資料庫」があります。今後、「慶谷壽信学術資料庫」の構築を計画しており、それに先駆け、またそれと歩調をあわせて、慶谷先生の学問などについて短い対談を複数回行い、随時掲載することにしました。

\* \* \* \* \*

中村：我々は、東京都立大学の大学院で研究の指導をしていただいたわけですが、慶谷先生の30年に及ぶ都立大への奉職期間の中では、後半（の前半？）の弟子ということになりますね。吉池さんが都立大に入ったのは確か1984年でしたか。

吉池：はい。わたしは都立大の大学院には5年間お世話になりました。初めの頃は、王国維の「書巴黎國民圖書館所藏唐寫本切韻後」（『観堂集林』）を読む授業（1984年度）や、唐鉞の「歌戈魚虞模古讀考管見」（『國故新探』）を読む授業（1985年度）に出ました。学生に担当部分を読ませ、課題が出てきたときには発表をさせるというスタイルでした。

中村：私は1982年に都立大の中文に学士入学して、1985年からの4年間は大学院でお世話になりました。1983年度の授業だったかと思いますが、王国維の「戦国時秦用籀文六国用古文説」（『観堂集林』）を読んで、その面白さに興奮しました。この授業の中で、慶谷先生を不快にさせた記憶があります。「剗滅古文」という文の出典が揚雄の「劇秦美新」であることを探し当てるのに諸橋大漢和を使ったら、先生は悲しそうな顔をして、そのような時には『佩文韻府』を使うのです、と。

吉池：大学院の5年間の後半は、有坂秀世に関する授業（1986年度および1988年度）の印象が強いのですが、それ以外に、趙誠の『中国古代韻書』（中華書局）の訳注の授業がありました。この授業は本文中の「韻書」「反切」など様々な項目について学生が担当し、解説を作って発表するというものでした。1987年度と1988年度の2年間に渡って行われ、慶谷先生ご自身も担当されました<sup>1</sup>。これには中村さんも参加していませんでしたか。

---

<sup>1</sup> 1988年1月21日と1988年6月16日の2回担当され、題は「反切と仏教文化」であった。1月は第一稿、6月は第二稿となっている。なお、1988年度の末にはインド学に関する手書きの資料「中國語學研究資料としての漢譯佛典 その前論：「佛陀の金口より漢土に至るま

中村：1987年度には参加しましたが1988年度は失敬しました。たぶん非常勤（横浜市立大学）の授業と重なっていたのだと思います。先生は初めこの本の訳注を出版するつもりでいたようですが、いかんせん授業の進捗状況はカメの歩みの如しで、とても数年で完成するようなメドは立ちませんでした。我々はもう少しペースを上げればいいのと思ったものですが、先生は間に合わせの仕事が大嫌いで、あくまで exhaustive な（＝徹底した）やり方を曲げませんでした。おかげで、一つ一つの項目についてじっくりと調べ考えることになりました。私は確か「反切」を担当したはずですが、その時に考えたことは同人誌『語学漫歩』に書いたことがあります<sup>2</sup>。しかし、なんと言っても先生の授業で印象深いものは有坂秀世についての講義ですね。言語学者の有坂秀世自身の話を期待していた所、両親や住所についての調査の話から始まったので驚きました。

吉池：有坂研究の授業では、先生の調査結果をお聞きするのが主でしたが、学生の発表もありましたね。中村さんは『語勢沿革研究』（有坂秀世著、三省堂、1964年）について話をしましたね。

中村：そんな事がありましたか？　そういえば何か話したような気がします。内容はほとんど覚えていませんが、琉球方言に関する事ではなかったでしょうか。『語勢沿革研究』の中に琉球方言の記述があって、有坂秀世がどのような資料を用いたかということ調べに国会図書館に足を運んだ記憶があります。授業が終わった後に、慶谷先生がボソッと、有坂秀世はもう若い人には魅力がないのですかねえ、とおっしゃったのを覚えています。もっと中心的なテーマで発表して欲しかったのでしょう。

吉池：発表ではありませんが、わたしにも宿題が課されました。私の出身が長野県であるということと関係があります。長野県に有坂神社というものがあるのだそうで、有坂家と関係があるかどうかということが話題になりました。吉池は長野県出身なので調べてみてはということになり、夏に帰省した折に調べることにしました。近所の神社の門を叩き、神主さんに伺ったところ、名簿を取り出して調べてくれたのですが、有坂神社というのは見つかりませんでした。慶谷先生ならば、ここでいま一押しするのですが、わたしはそれ以上の調査をすることもなく、あっさりとおしまひて今日に至っています<sup>3</sup>。

---

で」を配布し講義をされた。両者ともに手元に資料として残っている。

<sup>2</sup> 「「××反」から「××切」への改変をめぐる」（『語学漫歩』第3号、1987.12.19）と「学生室の午後」（『語学漫歩』第4号、1988.1.30）。後者は反切の口唱法について述べたもの。

<sup>3</sup> これを契機としてインターネットの検索にかけてみた。京都市宮津市畑277に有坂神社がある。ただし有坂は峠名とのこと。いまひとつ、長野県小県郡長和町古町有坂に諏訪神社があり、有坂神社とも称される。こちらの有坂は氏族名のようなものである。

中村：慶谷先生の調査は、尋常では無いほどに粘り強く、また exhaustive である、ということが特徴ですね。しかも実に楽しそうにやっておられた。

吉池：それと関連することですが、お書きになった論文や授業の中で、研究史など「物事の沿革」を扱った部分が、私には印象深いものとして残っています。別の言い方をすれば、これが適当であるかどうか不安ではあるのですが、慶谷先生の学問の柱に「物事の沿革の解明」があるように思います。

中村：物事の沿革の解明といいますと「「字母」という名称をめぐって」（『日本中國學會報』33、1981年）も、それにあたりますね。

吉池：沿革の解明というのは一面では研究史の解明ということでもあるのですが、研究史となると「前史—石塚龍麿から有坂秀世まで」（『中国語学』228、1981年）でしょうか。

中村：まず、重紐という音韻の問題に関連して「前史—石塚龍麿から有坂秀世まで」を書き、次いで有坂秀世の人と学問に関心が向いた。慶谷先生にとって、有坂は研究史の対象として、びたりとはまったのかもかもしれませんね。有坂秀世については、育った環境と学問との関係を示唆する父母兄弟の情報が多く残されている。また、高校時代の研究ノート（『語勢沿革研究』）に反映した考え方が大学入学後にどの様に進展したかなどの跡を辿ることもできる。これほど研究史にとって恰好の人物はいないでしょう。

吉池：しかも有坂氏は、論文を何度も書き直して発表していますね。このような態度というか学問の仕方によって残された資料は、研究史の解明にとって有利に働いたことでしょうか。そのことは、『有坂秀世言語学国語学著述拾遺』（慶谷壽信、有坂愛彦編、三省堂、1989年）に収められた慶谷先生の論文「「有坂秀吉氏音韻論手簡」について」に見て取ることができます。この論文では、有坂氏が諸論文において繰り返し書き改め公表した音韻についての考え方を紹介しつつ、考え方の展開を論じています。

中村：慶谷先生は、有坂氏の大正大学での講義録を発見し「国語学史の講義録」として『著述拾遺』に収めたわけですが、これも徹底した調査の賜物でしょうね。

吉池：最後になりますが、慶谷先生の授業などで印象に残っていることはありますか。

中村：大学院に入ってから、「目録学」の授業に出たことがありました。これは「中国語学概論」という学部の授業だったのですが、資料の荷物運びをしますからとお願いして受

講させていただきました。「漢書芸文志」の記述を中心に古代の学術を見渡した非常に素晴らしい授業で毎回出席するのが楽しみでした。この授業が始まる時に、一つ難題が持ち上がりました。全盲全聾の学生F君がこの授業を受講したいと慶谷先生の所に来たのです。何しろ授業の骨格は古い文献を実際に手に取って見てもらうことでしたから、先生も困ったと思います。F君側からは書き下しの文章であれば何とかなるということでしたが、膨大な資料に全部書き下しを施す訳にもいきません。折衷案として授業のノートを毎回コピーしてF君に渡すことになりました。正規の履修者で中文の学生は一人もいませんでしたから、必然的に私のノートをコピーして翌週渡すことになりました。私は高校以来（というか小学生以来）授業のノートを取るという習慣がありませんでしたから、かなり苦労してノートを作った記憶があります。F君は毎回律儀にコピー代金10円を払ってくれました。最後の授業の分は前渡しで10円を頂いたのですが、実はその後F君に会う機会がなく、最終回のコピーは渡さず仕舞いになりました。F君、ごめん<sup>4</sup>。吉池さんの方は何か印象的な事はありますか。

吉池：なにかの授業の際に、学問の方法ということについて、話をされたことがあります。たしか「研究という森の中で迷ったなら、真っ直ぐに進め、そうすれば、たとえ遠回りになったとしても必ず外に出ることができる（結果を得ることができる）」というような趣旨でした<sup>5</sup>。当時先生は有坂研究に真正面から取り組んでおられた時期であり、その姿を見ていたためでしょうか、説得力をもってストーンと腹に落ちたことを覚えています。

中村：なるほど。

---

<sup>4</sup> F君はその後、知る人ぞ知る東大教授になった。

<sup>5</sup> ほぼ同様の内容がデカルトの『方法序説』にあることを、その後知った。